
山の国

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山の国

【Nコード】

N0409V

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

樹の国で子供達が話している。「山の国が宣戦布告してきたんだってさ」

「怖いね。戦争が始まるのかな」

「イヤだね。たくさん死ぬのかな。なんで戦争なんて考えるんだろうね」

樹の国で子供達が話しています。

「山の国が宣戦布告してきたんだってさ」

「怖いね。戦争が始まるのかな」

「イヤだね。たくさん死ぬのかな。なんで戦争なんて考えるんだろ
うね」

樹の国はこれといった問題のない平和な国だった。林業を中心に、貿易でそれなりの利益を出していて、国の人々はみんな豊かに暮らしていた。だからお隣の山の国が宣戦布告してきたときは、みんな驚いて声も出なかった。

樹の国には戦争をするような用意はない。武器を持って争う時代は少し前に終わっていて、武器を手にとることがあまり心地いいことではないことを国の人々が知っていた。困った樹の国の人々は、開戦までに与えられた猶予で「戦争屋」を呼ぶことにした。戦争屋さんは各地で行われている戦争に手を貸すことを仕事としている。だいたい戦争屋さんを雇ったほうが勝つんだ、とは、国々を駆け巡る噂の一つだ。けれど、元々勝ちそうなほうにしか戦争屋が味方しないんじゃないか。と言われたら、誰も反論できなかった。

だから樹の国の人々はオクバと呼ばれているその戦争屋を前にして、とても不安になった。

オクバが少年だったことも多少ある。

「お待たせして申し訳ありません。戦争屋のオクバさん」

「かまわないぞ。オクバは退屈しないんだ」

オクバを国の持つもつともいい部屋に通した樹の国の王様は、オ

クバに対して（いやなガキだな）という印象を持った。樹の国は小さな国だが、王様は王様だ。なのにまったく物怖じした様子を見せない。王様というだけで相手が一步引いた態度を取ってくれるに慣れている王様には、少し気に食わなかった。

「それでこの度の依頼ですが」

「いちおくちようどだ！」

「一億、ですか？」

ガキに払うには高いが、それで戦争を片づけられるならとんでもなく安いな。と王様は思う。しかしこんな子供に、戦争を片づけるだけの力があるのだろうか？ 王様は田舎者だった。

「オクバさんは、その、魔法持ちなのでしょうか」

「そうだけ」

とオクバの肩に止まっていた鳥が代わりに答えた。

「いまぼくが話してるんだよ。アトは口ださないで」

「へいへい」

王様にはその鳥がとても位の高い使い魔であることに気づきませんでした。なので「報酬の一億は後払いでしかお渡しすることができません」と言った。

「いいよ。別に。勝つし」

オクバはあっさりと言う。

あまりにもあっけからんとしていて、王様はもつと不安になる。

オクバは契約書にへたくそな字でサインをする。

「あ、一つ訊いてもいいかな？」

「はい。なんでしょうか」

「なんで移民を受け入れないの？ 山の国はずっと移民を受け入れてくれるように申請してるって聞いてたんだけど」

「樹の国とてそう多くの資源を持っている訳ではありません。赤の他人に与えることのできるほど、潤ってはいないのです」

「ふうん」

オクバは曖昧な返事をして、王様を残してさっさと部屋から出て

いった。

そして戦争の当日、数少ない樹の国の兵士を捕まえてオクバは「ねえねえ、このあたりで一番高いところってどこかなあ？」と尋ねた。オクバの外見が小さな子供なので大抵は相手にされなかったが、事情を知っている将校さんが慌ててオクバが求めた場所に案内をした。そこは高い丘になっていて、山の国が兵を進めてくれば必ずすべての部隊がそこから見える場所を通る場所だ。

オクバは満足して、将校さんに「ありがとう。これからここに絶対に近づかないでね」と言う。

将校さんは頷いて、他の兵士達にその場所には絶対に近づくなと命令する。

戦争が始まる。

山の国には少数だが鋼目と呼ばれる一族が住んでいる。虹彩の色が銀色なのが特徴で、生まれつき普通の人よりも力の強い一族だ。そんな一族だから、一時期戦争にはとても重宝された。山の国は、鉱脈を掘り、そこから取れる鉄鋼石を売って暮らしている国だ。鉄からは武器ができる。鋼目の一族の力は鉱脈を掘ることにとても役に立つが、戦争にはもつと役に立つ。まともに戦えば、樹の国には勝ち目がない

「なあ、樹の国がオクバって戦争屋を雇ったらしいぜ」

山の国の兵士が言う。

「オクバ？ 変な名前だなあ」

「オクバだもんな。奥歯」

それを聞いて一人の兵士が血相を変えた。

「なあ、それってもしかして、億の刃って書いて『億刃』じゃない

か？ 俺、知ってるんだよ。それと戦った国がどうなったか」

兵士達は高い丘から見下ろせる場所にいた。

頭上から剣がたくさん降ってきた。たくさんたくさんたくさん降ってきた。防ぎようがなく、カブトは割れて、鎧は貫かれて、みんな死んだ。

「剣の雨を降らせるだけの簡単なお仕事、ってか」

アトと呼ばれた使い魔の鳥が楽しそうに笑う。

「いや、まだみたいだ。一人生き残ってる」

たしなめるようにオクバが言う。

生き残った一人はただ剣を降らせるだけでは殺せそうになかった。鋼色の目に諦めに似た光を帯びさせて、高い丘を一足で登ってくる。十七、八の青年だった。オクバほどではないが、まだ幼さの残る顔立ちをしている。

オクバは両手に剣を構えた。さっき青年に防がれた大量生産品と違い、薄い刃を持ち切れ味の鋭い物だ。

鋼目の一族の青年が地面を蹴ってくる。風よりも速く、猫のようにしなやかな動きで、オクバが進路を妨害するように生み出した剣の隙間を縫うようにして駆ける。スピードをほとんど落とさない。切っ先がぎりぎり届く間合いに入ってオクバは剣を振るった。青年は急ブレーキを踏んで上半身を逸らして剣を避ける。そのまま足を振りあげようとしたが、途中で止めた。丁度蹴りだそうとした足の軌道上に剣が生まれかけていたからだ。

強い魔法だなと青年は思った。

オクバがさつき振ったほうと逆の手から、鋭い切っ先が伸びる。

青年はその刃を歯に挟むと、頭を振って真ん中からへし折る。同時に体を捻った勢いを利用して掌打を繰り出す。オクバの頬をこすり、肩の上で腕が伸びきる。軌道上にいた使い魔がわずかに浮いてそれかわす。青年は腕を引き戻そうとするが、オクバが剣を降らせる

ほうが速かった。青年の腕が肘の辺りで切れた。激痛で頭が真っ白になるのを、青年は止められなかった。その隙を逃さずに両足の甲に一本づつ、地面に縫い止めるように重い剣が突き刺さる。残った腕でオクバを殴ろうと拳を構えるが、それも分厚い剣の峰に防がれてしまう。喉に柄の部分を叩きつけられて、青年は仰向けに地面に転がった。こんな日だというのに、青空はとてもきれいに青年の銀色の目を照らしている。

「なあオクバさん。なんで俺って死なないといけないのかな」

オクバは振り降ろそうとしていた、とても鋭い剣を止めた。

「山の国は鉱脈を掘り尽くしちゃった。隣の国には富があり、俺たちには力があつた。隣の国は移民を受け入れてくれなかった。二ヶ月もすれば山の国は餓死者で溢れかえる。教えてくれよ。俺はどうすればよかったんだろう」

「知らないよ」

「だよな」

青年は目を閉じた。

殺されるのを待つように目を閉じた。

「強いて言うなら、君は強いし他の国に雇われればよかったんじゃないかなあ」

「だけど、死の代わりに降ってきたのは言葉だった。」

「祖国の人間を見捨てると？」

「うん。だってみんなが君みたいな力を持つてる訳じゃないんだろ。だつたら能力がないその人たちが悪かつたんだ」

「

「ふざけるなよ。弱いことは悪いことじゃない」

「ああ、言い方が悪かつたね。能力のない、その人たちの、運が悪かつたんだ」

青年はなにも言えない。

山の国は戦争に負けた。

それから数年が経った。

川の国で子供達が話してる。

「樹の国が宣戦布告してきたんだってさ」

「怖いね。戦争が始まるのかな」

「イヤだね。たくさん死ぬのかな。なんで戦争なんて考えるんだろ
うね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409v/>

山の国

2011年7月21日03時48分発行